

投句欄 自由律の泉 ㊶

- | | | |
|----|---------------------|---------|
| 1 | 何も起こらず日が暮れてこれもいちにち | 久光 良一 |
| 2 | 好きな事をしている子供の顔だ | 無 一 |
| 3 | 呑み過ぎ静かに一人寝 | 木村 浩 |
| 4 | 山の上飛行機飛んでいく鳥飛んでいく | 大岳 次郎 |
| 5 | いつだって懸命 今々がすき | 竹内 朋子 |
| 6 | 寂々と洗濯機の音 | アカホリ フキ |
| 7 | ため息がさがしまわる | 金澤 ひろあき |
| 8 | コブシの蕾ふくらむ教会に渦中の人 | 平林 吉明 |
| 9 | 一生懸命に歩んだ道振りかえる日々 | 山本 説子 |
| 10 | きつと忘れた頃に思い出すよ | 原 さつき |
| 11 | 眠れない夜 空想の世界へはばだけ | 増田 壽恵子 |
| 12 | 食パン匂うマラソンの朝 | 野谷 真治 |
| 13 | 天色の空にため息一つ | 池田 恵三 |
| 14 | 振り向いたらノラ君と目が合ってしまった | ちば つゆこ |
| 15 | 言い過ぎました不揃いな玉葱 | 井尾 良子 |
| 16 | 不具合と折り合って歳重ね | 植田 鬼灯 |
| 17 | 朝の寒空サンドイッチのパンの色 | 田中 直心 |
| 18 | 私を他人扱いする私は誰 | 一の橋 世京 |
| 19 | 背負いすぎた荷冬草にどかつと下ろす | 鈴木 和枝 |
| 20 | うす雲の中の満月 今の幸せ | 泥谷 文吾 |
| 21 | 列からひとつ離れてランドセル | 青井 こおり |
| 22 | 眠れない時計の針の影を見ている | 富永 鳩山 |
| 23 | 神の叫びを聞いている罪の日の横臥 | 部屋 慈音 |

24 寒風に一輪だけ
新山 賢治

25 ○・三ミリ深い青で今日をつぶやく
富永 順子

26 せかさされる風花早口になる
原 鈴子

27 春を待つ花にもぼたん雪
荻島 賢治

28 私を救う私を踏ん張る足
黒瀬 文子

29 うらうらと天神通りの牛の声
平岡 久美子

30 赤シャツ白シャツくるりくるくる風のワルツ
佐瀬 風井梧

31 光さすお別れの下駄箱
佐川 智英実

32 白菜洗う旧姓が揺れている
さいとう こころ

33 筋肉と言いつ張ったが機械の正直者め
湯原 柳泉洞

34 今も生きているこの選択は間違っていない
白松 いちろう

●泉²⁵より 一句鑑賞

とぎれとぎれの思い出と生きる
富永 鳩山

▼作者はきつと沢山の素晴らしい思い出の中におられる事でございませう。私も年を重ね同じようにいろいろと思ひ出す毎日でございます。思ひ出に感謝、感謝。
(山本 説子)

どうやら慣れてきた5ミリカットの坊主頭
白松 いちろう

▼むかしはずつと坊主頭であったようですが、毛が薄くなってしまった近ごろは、惜しむが如く前髪部分を少しだけ伸ばしています。白松さんは坊主頭がとても似合っています。素敵です。寒くてもがまんして下さい。
(大岳 次郎)

少しだけ外れたものに惹かれている
富永 順子

▼少しだけ外れているものの方が自然で、人間らしいという作者の中にあるものとの共鳴であり、常にそのように事象を見る作者の美学ではないのだろうか。
(部屋 慈音)

薄笑い 耳が遠いのは内緒です
平岡 久美子

▼歳をとつてくると耳の聞こえが悪くなつてきて、時には相手の言ったことがよく聞こえないこともあります。そんな時、たいした話題でもなさそうな場合は、聞こえたふりをして、ちよつと薄笑いをおきます。

(久光 良一)

▼あなたも難聴なのですね。今、私は補聴器をしても電話が聞きにくい
です。倅はもう一人暮しは無理だと言います。しかし、私は我家に居た
いと無理して頑張っています。
(増田 壽恵子)

▼少しわるいだけで皆には気付かれていない、本人は聞き取れているの
か、いないのか、薄笑いでごまかす。一字空けが良く効いています。
(鈴木 和枝)

また今日もいまからビール朝三時

大岳 次郎

▼年に数回ですが同じくらしいの時間から呑み始める事が有ります。仕事
終わりには、やはりビール一盃。よく分かります。
(木村 浩)

平穏な一日という薄氷

久光 良一

▼その通りです。「薄氷」のようにもろい「平穏」……。 (無 一)

▼よく平凡でいい、あるいは何事もなければそれでいい、などと言いま
すが、欲がないように聞こえるという「普通」の日々がいかに危うい
かを見事にあらわしていると思います。
(青井 こおり)

▼平穏な一日 何事もなく、静かに終わる一日のこと、外にも出ず、誰
も来ず、自分だけのゆつたりの時間、それをいうとする。薄氷さえ割れ
ることもない。しずかに溶ける。
(原 鈴子)

▼一日何事もなく無事で過ごせた。しかしちよつと考えれば、この平和
な日常もそんな暢気に構えられるものではない。実は、この大切な平穏
な日常はすぐこわれてしまう薄氷を踏むような不安極まりない日常で
ある。だからこの一日を過ごせたことに感謝の思いを深くするのである
と。「薄氷」は素晴らしい表現とおもった。
(佐瀬 風井梧)

言霊の月光を投函する

野谷 真治

▼幻想に誘われる句。手紙に書いた言葉の霊が月光と化して、ポストに
吸いこまれる。そしてポストの中を光で満たす。自然と心の中で映像化
していた。
(金澤 ひろあき)

▼「言霊の月光」言葉と向き合い、言葉を深く信じ大切にしている作者
のその思いの輝きが伝わりますように。
(平林 吉明)

胸にくるんで消せない懐い

植田 鬼灯

▼よほど大切な懐いなのでしようね。大事に大事に胸の奥にしまってお
く……。きっと作者にとって唯一無二のもので、永遠のもの。
(原 さつき)

やられたからやり返す猫のケンカも戦争も 金澤 ひろあき

▼平和の構築は共生・共存・文治であろう。共生できない部分は共存と
し、相手の存在を認め合えば争いにならないと思うが、人間だから法令
も必要だと思ふ。
(泥谷 文吾)

難儀やろ 亡母の声する日暮坂

原 さつき

▼生きていると楽しいことばかりではない。仕事を終えて帰りの坂の途
中ほつと一息つくど、どこからともなく亡き母の声が「難儀やろ」。な
つかしいふるさとの言葉、また明日もがんばろう。母の声とは心が元氣
になり温かい。
(井尾 良子)

信じて老いて悟る道

竹内 朋子

▼幼い頃「生老病死」について考えて眠れなかったことを思い出します。

安穩と冴える休日。

(アカホリ フキ)

枯れ枝ふりふり少年へ還つてゆく

佐瀬 風井梧

▼この頃のウオーキングで、私も藪のツバキを一枝いただいたり、子供に戻って歩いています。もう少し、体が柔らかくなったら、前山にある山城に登ろうと思います。子供の頃遊びまわった山です。子供返りです。

(ちば つゆこ)

ほほえみの形に唇を描く

篠原 紀子

▼今日も一日良いことがありますように！と女性らしい可愛らしい句だと思いました。明るい窓辺の陽光を感じました。

(竹内 朋子)

▼知り合いの似顔絵師の中には、いつも笑顔の似顔絵を描く人がいる。「人は、少しほほえんでいる顔が、すてきなさ」と、彼は言う。「ほほえみの形の唇」は、優しさを感ずる。

(野谷 真治)

▼新しい出会いにわくわくしているのか、悲しい気持ちを隠すためなのか、どちらにも受け取れる一句ですね。

(佐川 智英実)

ひたひたと足音あなたは誰ですか

井尾 良子

▼毎朝起床したとき、予定を確認しています。(スマホのカレンダー機能で)これを始めたのは、大切な予定を忘れたのがキツカケですが、それでも、あの件はすんだな、あれは明日、またアレは余裕があるな。等、ひたひたと迫る足音を感じることがあります。色々な誰かが、毎日のように、私についてきています。その誰かと毎日格闘する、この頃です。このような思いを代表するような句を読ませていただきました。同感です。

(田中 直心)

怒鳴った妻に翌朝の「おはよう」

新山 賢治

▼よくわかる。酒を飲んでご機嫌の折、これがいいんだという時には少しの雑音さえ短気の種だ、瞬間、道理など通らない。煩い静かにしてろい、という。それで翌朝、何事もなかったかのようにしている。しかし、句を読むくらいには後ろめたい自覚がある。

(湯原 柳泉洞)

▼こういう句のことを「俳味」があるというのでしょうか。でも妻としては「全く……」と言いたいところです。ただどあえて言うなら「おはよう」と言えた作者に拍手ですね。

(平岡 久美子)

● 係より

お願い お忙しい皆さまに申し訳ないのですが、このところ「感想」が少ないと感じています。どうかふるってお寄せください。お願いします。

次回も、皆様の作品一句と、今回の作品の感想をお寄せください。左記宛て、同封の投句用紙、またはメールにて。

〈送り先〉〒193・0832 八王子市散田町2・58・4

平岡久美子

メール izumi.jiyuritsu@gmail.com

※投稿先のメールアドレスはこちらに変更になっています。

〈締め切り〉 2025年 5月15日

★「自由律の泉」にご投稿いただいた句や感想は、自由律俳句協会のホームページや公式X、機関誌などでも紹介させていただきます。